

# 英語史の研究

寺 澤 盾

英語史と言うと、一般には過去の英語を対象にしているといったイメージが強いのではないだろうか。一方、英語教育の分野では主たる関心は学習・教育の対象である現代英語ということになる。「過去志向」の英語史と「現代志向」の英語教育はあまり接点がないと思われたとしても不思議ではないが、実は英語史は現代英語に見られるさまざまな不規則性を解き明かすことで英語学習者の英語に対する興味を喚起し、学習意欲を促進させる効果があり、英語教育にも資するところが多いと思われる。こうした中、英語史と英語教育をつなぐ研究が最近活発になってきているが、家入葉子（編）『これからの英語教育——英語史研究との対話』（大阪洋書）は、2014年に日本英文学会第86回大会で行われたシンポジウム「グローバル時代の英語教育——英語史からの貢献」の発表論文を中心に編まれた論文集である。近年の英語史研究では大規模な共時・通時コーパスに基づいた現代英語の史的・研究も盛んになっており、今後さらにより実質的な形で英語教育に貢献できる可能性があると思われる。

以下では、2016年1月～12月に刊行された英語史関連の文献をできるだけ広く紹介していきたい。文献情報収集にあたっては三浦あゆみ氏のウェブページ *A Gateway to Studying HEL*（「2016年刊行文献」）を参照させていただいた。

## I. 通 史

はじめに英語史の入門書として、日本の英語史研究を牽引している2人の俊英によるものを紹介したい。唐澤一友『世界の英語ができるまで』（亜紀書房）は、世界各地で話されている多様な英語の形成に焦点を当てた新しいタイプの英語史本である。堀田隆一『英語の「なぜ?」に答える はじめての英語史』（研究社）は、「なぜ3単現に-sを付けるのか」など、英語に関わる素朴な疑問に英語史の観点から答えていくもので、英語教育関係者にも必読の書となるであろう（companion websiteもある）。海外ではSimon Horobin, *How English Became English: A Short History of a Global Language* (Oxford University Press) が上梓されたが、このreadableな入門書では英語の規範・標準の問題や英語の未来にも話が及ぶ。Keith Johnson, *The History of Early English: An Activity-Based Approach* (Routledge) は古英語から初期近代英語までを扱っており、チョーサーやシェイクスピアからの抜粋を読みながら学ぶことができる（companion website付き）。英語史入門書として定評のあるLaurel J. Brinton and Leslie K. Arnovick, *The English Language: A Linguistic History* (Oxford University

Press)の改訂版(第3版)も出版されたが、補遺として各時期の英語から specimen texts が加わった。英語史のハンドブックとして、Merja Kytö and Päivi Pahta, eds. *The Cambridge Handbook of English Historical Linguistics* (Cambridge University Press) が上梓されたが、Gabriella Mazzon, “English Historical Pragmatics”, Simon Horobin, “Manuscripts and Early Printed Books”, Joan C. Beal, “Standardization”, Philip Durkin, “The OED and HTOED as Tools in Practical Research” など英語の史的研 究の多様性を示す興味深い 28 本の論文が収められている。

音韻史を扱ったものとしては、Gjertrud Flermoen Stenbrenden, *Long-Vowel Shifts in English, c. 1050–1700: Evidence from Spelling* (Cambridge University Press) が挙げられる。これは中英語期の綴りを詳細に考察することで、(大母音推移と呼ばれる)長母音変化のメカニズムを再検討したものである。

語彙史に関わるものとして、以下の 3 冊を紹介したい。‘Byzantine’ (ビザンティン帝国の; 融通の利かない) や ‘Victorian’ (ヴィクトリア朝の; 上品ぶった) のように現代英語では過去の時代と結びつく言葉がしばしば(否定的ニュアンスを伴って)用いられることがあるが、Ross Wilson (*The Language of the Past* [Bloomsbury Academic]) は過去の時代に関わる英語表現を分析したものである。Susan E. Deskins (*Alliterative Proverbs in Medieval England: Language Choice and Literary Meaning* [The Ohio State University Press]) は、中英語期になると一部の地域を除けば衰退していった頭韻が人々の日常に関わる諺などにおいて脈々と受け継がれていたことを示す。Marcin Kudła (*A Study of Attributive Ethnonyms in the History of English with Special Reference to Foodsemy* [Peter Lang]) は、特定の民族に対して用いられるステレオタイプ化された比喩(とりわけ食物に言及したメタファー)に焦点を当て、そうした表現を認知言語学的観点から分析している。

辞書関連のものとしては、まず Rebecca Shapiro, *Fixing Babel: An Historical Anthology of Applied English Lexicography* (Bucknell University Press) が挙げられる。一般に辞書に添えられた前付は辞書使用者にはあまり読まれることはないが、そこには辞書編集者の言語への姿勢が記されていることが多い。本書は 17 世紀から 19 世紀初めにかけて出版された辞書 (Robert Cawdrey の *A Table Alphabeticall* [1604] から Noah Webster の *An American Dictionary of the English Language* [1828] まで) の前付などを収めたアンソロジーであり、それぞれの辞書編集者の英語に対する姿勢を伺い知ることができる。OED に関するものも複数出版されている。Peter Gilliver, *The Making of the Oxford English Dictionary* (Oxford University Press) は著者自身も 30 年間にわたり関わった OED の製作・編集過程を新たな資料や証言に基づき詳細に記録したもの。OED の chief editor を務めた John Simpson による著書も刊行されている (*The Word Detective: A Life in Words from Serendipity to Selfie* [Little, Brown])。

辞書編集にまつわるエピソードなどが具体例を用いてユーモアとウィットを交えて紹介されている。なお、同書は *The Word Detective: Searching for the Meaning of It All at the Oxford English Dictionary (Basic Books)* というタイトル (副題が異なる) で米国でも出版されているが、内容は全く同じである。

文法関連では、日本人研究者による単著が 2 冊上梓された。Fujio Nakamura, *Unveiling 'Rare' Usages in the History of English* (Eihosha) は稀な (非標準的な) 文法用法 (e.g. He don't know / being going) を通時的に考察したものである。佐藤勝『英語準動詞・節の実証通時研究——英語聖書四福音書を言語資料として』(英宝社) は英訳聖書 (福音書) を用いて英語の不定詞や節における通時の変化を記述した実証的研究。文法変化を扱った論文集として、田中智之・中川直志・久米祐介・山村崇斗 (共編)『文法変化と言語理論』(開拓社) にもふれたい。これは日本における理論的英語史研究の拠点の一つである名古屋大学英語学研究室のメンバーによる論集である。

意味変化を扱ったものとしては、寺澤盾『英単語の世界——多義語と意味変化から見る』(中央公論新社) が挙げられる。英語の多義語の中には bar (棒; 酒場; 法廷) のように一見全く関連が見られないような複数の意味を内包しているものがあるが、本書ではメタファーなどの概念を用いながら多義語の異なる意味を繋ぐ歴史の糸を紐解いていく。メタファーは近年の言語学研究では関心の中心の 1 つになっているが、Wendy Anderson, Ellen Bramwell and Carole Hough, eds. *Mapping English Metaphor Through Time* (Oxford University Press) は *Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary* を利用し、英語に見られる様々な隠喩表現を歴史的に考察した論文集である。Christian Kay, “Food as a Fruitful Source of Metaphor”, Kenneth Austin, “Metaphors of Religious Anxiety in Early Modern England”, Daria Izdebska, “Metaphors of Weapons and Armour through Time” など収録。

英語の変異に焦点を当てたものとしては、Daniela Cesiri, *Variation in English across Time, Space and Discourse: An Introductory Textbook* (Carocci editore) がある。世界で共通言語として使われている英語にはさまざまな変異 (variation) が見られるが、本書は英語のもつ多様な姿を歴史・社会・地理的側面から説明した入門書である (もともとはイタリアの大学で英語を専攻する学生のために編まれたもの)。Robert McColl Millar, *Contact: The Interaction of Closely Related Linguistic Varieties and the History of English* (Edinburgh University Press) も異なる変種・方言の接触という視点から英語史を考察したものである。香港の英語は 170 年の歴史を持つが、Stephen Evans, *The English Language in Hong Kong: Diachronic and Synchronic Perspectives* (Palgrave Pivot) は中国語との 2 言語併用の中で香港英語がどのような変化を遂げたのかを辿る。「一国二制度」が終わる 2047 年以降の香港英語の未来についてもふれていて興味深い。

コーパスを使った英語の共時的・通時的研究は昨今ますます盛んになっているが、María José López-Couso, Belén Méndez-Naya, Paloma Núñez-Peretejo and Ignacio M. Palacios-Martínez, eds. *Corpus Linguistics on the Move: Exploring and Understanding English through Corpora* (Brill) は最近の英語コーパス研究の成果をまとめた論文集である。英語の変異・変化に関わる論文としては、Anita Auer, Moragh Gordon and Mike Olson, “English Urban Vernaculars, 1400-1700: Digitizing Text from Manuscript”, Johan Elsness, “English in South Africa: The Case of Past-referring Verb Forms”, Eduardo Coto-Villalibre, “A Look at Participial Constructions with *Get* in Hong Kong English”, Marianne Hundt, “Who is the/a/O Professor at Your University? A Construction-Grammar View on Changing Article Use with Single Role Predicates in American English”, Bianca Widlitzki and Magnus Huber, “Taboo Language and Swearing in Eighteenth and Nineteenth Century English: A Diachronic Study Based on the *Old Bailey Corpus*”。

## II. 時代別

〈〈OE〉〉 リンディスファーン福音書に関する論文集として Julia Fernández Cuesta and Sara M. Pons-Sanz, eds. *The Old English Gloss to the Lindisfarne Gospels: Language, Author and Context* (Walter de Gruyter) が刊行された。古英語によるグロスが誰が加えたのか、Rushworth Gospels との関係など興味深い問題を考察した論文が収められている。小竹直氏の論文 (“Did Owun Really Copy from the Lindisfarne Gospels? Reconsideration of His Source Manuscript(s)”) も含まれている。Anna Cichosz, Jerzy Gaszewski and Piotr Pezik, *Element Order in Old English and Old High German Translations* (John Benjamins) はラテン語からの翻訳テキストを比較することで古英語と古高ドイツ語の語順の違いを分析したものである。

古英語から中英語にかけての英語の発達を多言語使用の文脈の中で考察した Emily Butler, *Language and Community in Early England: Imagining Distance in Medieval Literature* (Routledge) も重要である。Tim William Machan, ed. *Imagining Medieval English: Language Structures and Theories, 500-1500* (Cambridge University Press) は中世英語に関する論文集。Jeremy Smith, “The Evolution of Old and Middle English Texts”, Christopher M. Cain, “‘*þæt is on englisce*’: Performing Multilingualism in Anglo-Saxon England”, David Matthews, “Ideas of Medieval English in the Eighteenth and Nineteenth Centuries” など 13 本の論文所収。

〈〈ME〉〉 中英語の分野では、日本人による研究書が複数出ている。田島松二『中英語の統語法と文体』(南雲堂)はテキストを語学的に厳密に読む日本人研究者の強みを活かして、『カンタベリー物語』や『真珠』などにおける *crux* を読み解く。Kiyooki

Kikuchi, *The Sound of Literature: Aspects of Language and Style in The Owl and the Nightingale* (Shumpusha) は著者による中英語論争詩『梟とナイチンゲール』についての研究の集大成と言える。

海外に目を向けると、中英語の統語法の研究書として未だにその価値を失わない Tauno F. Mustanoja のリプリント版 (*A Middle English Syntax: Parts of Speech* [John Benjamins]) が出たのは嬉しいニュースである。この再版には Elly van Gelderen による序論が添えられている。

ウィリアム・カクストンはオウィディウスの『変形譚』の英訳(ラテン語原典からでなくフランス語版から)を1480年に出版しているが、Wolfgang Mager, ed. *The Middle English Text of Caxton's Ovid, Books II-III* (Universitätsverlag Winter) はその Books II-III をフランス語のテキスト、コメントリーなどを添えて刊行したものである(Book I の刊本 [Diana Rumrich 編] は2011年に既刊)。

〈ModE〉最初に、日本における英訳聖書研究の第一人者として活躍してきた寺澤芳雄による著作にふれたい。『聖書の英語の研究』(研究社)は、近代英語や英語文化へ多大な影響を与えた Authorized Version (AV 1611年)に関する氏の研究の集大成であり、AVの成立、その言語特徴、アメリカにおける受容のほか、現代英語とは意味・用法の点で異なる約300語を詳細に説明した「AV要語集」、「英訳聖書年表」も付いている。なお、氏は本書の出版を見ることなく2016年9月逝去。

シェイクスピアが活躍していた頃は、いわゆる大母音推移などの音韻変化が進行中であり、作品に現れる単語がどのように発音されていたのかという問いに答えるのは意外と難しい。David Crystal, *The Oxford Dictionary of Original Shakespearean Pronunciation* (Oxford University Press) は、シェイクスピア作品に用いられている全ての語についてその当時の発音をIPAで記した画期的な発音辞典であり、Websiteで実際に発音を確認して聴くこともできる。研究者だけでなくシェイクスピア劇を演じる役者にとっても必見(聴)の文献となるであろう。シェイクスピア作品の台詞には相手を侮辱する表現が度々現れるが、Nathalie Vienne-Guerrin, *Shakespeare's Insults: A Pragmatic Dictionary* (Bloomsbury Publishing) はそうした侮蔑語をアルファベット順にならば詳しく解説したユニークな辞書である。

近代以降は書簡をはじめとして様々なジャンルの英語が見られるようになるが、特定のジャンルの英語の研究も近代英語研究の特徴の1つと言える。まず、書簡に関しては Alison Wiggins による *Bess of Hardwick's Letters: Language, Materiality, and Early Modern Epistolary Culture* (Routledge) が挙げられる。Bess of Hardwick はエリザベス1世に仕えた Elizabeth Talbot (1518-1608) の通称であるが、本書はその書簡集の言語を分析したものである。Matylda Włodarczyk の *Genre and Literacies in the Late Modern Period: Historical (Socio)pragmatics of the 1820 Settler Petition*

(Wydawnictwo Naukowe)は19世紀前半に南アフリカのケープ植民地に赴いた人々の300通にのぼる書簡を分析したものである。

一方, Isabel Moskowich, Begoña Crespo, Inés Lareo and Gonzalo Camiña Rioboo, eds. *'The Conditioned and the Unconditioned': Late Modern English Texts on Philosophy* (John Benjamins)は18~19世紀の哲学分野の英語文献コーパス(*The Corpus of English Philosophy Texts*)に関する論考やそれを用いた研究論文集である。Max Décharné, *Vulgar Tongues: A History of English Slang* (Serpent's Tail)では、作家・作曲家・音楽家である著者がエリザベス朝から現代まで英語の俗語の歴史を具体例にふれながら考察している。

規範意識の勃興も近代英語期の特徴と言えるが, Ingrid Tiekken-Boon van Ostade and Carol Percy, eds. *Prescription and Tradition in Language: Establishing Standards across Time and Space* (Multilingual Matters)は言語の規範と標準語の成立の問題を考察した論文集である。英語に関する論文としては, Wendy Ayres-Bennett and Ingrid Tiekken-Boon van Ostade, "Prescriptivism in a Comparative Perspective: The Case of France and England", Rita Queiroz de Barros, "A Higher Standard of Correctness than is Quite Desirable': Linguistic Prescriptivism in Charles Dickens' Journals", Robin Straaijer, "A Perspective on Prescriptivism: Language in Reviews of *The New Fowler's Modern English Usage*"が挙げられる。Lieselotte Anderwald, *Language Between Description and Prescription: Verbs and Verb Categories in Nineteenth-Century Grammars of English* (Oxford University Press)は19世紀に英米で出版された258冊に及ぶ文法書を精査し、文法家が当時起きていた言語変化にどのように反応していたのかを考察したもの。19世紀には進行形の受動態(e.g. being cooked)やgetを用いた受動文が新たに発達してくるが、当時は前者にのみ批判の目が向けられていたことなど興味深い事実が数多く指摘されている。

英語の歴史社会言語学研究の草分けであり、チューダー朝からスチュアート朝の英語を社会言語学的視点で分析した Terttu Nevalainen and Helena Raumolin-Brunberg, *Historical Sociolinguistics: Language Change in Tudor and Stuart England* (Routledge)の第2版が出たことも添えておく。"Language Change and the Individual"など新たな章が加わった。

〈PDE〉20世紀以降の現代英語に関する研究もますます盛んになってきている。周知のように、BBCはアナウンサー向けに英語の発音や言葉使いに関する指針を作るため、諮問委員会(BBC's Advisory Committee, 1926-39)を設けた(George Bernard ShawやJulian Huxleyなどもそのメンバーであった)。口語英語を規制しようとするその試みは頓挫することになるが、Jürg R. Schwyter, *Dictating to the Mob: The History of the BBC Advisory Committee on Spoken English* (Oxford University

Press) は委員会の辿った歴史を丁寧を追っている。

Douglas Biber and Bethany Gray, *Grammatical Complexity in Academic English: Linguistic Change in Writing* (Cambridge University Press) は学術英語に見られる言語的变化を考察している。近年、アカデミックライティングでは精巧で凝った文法構造よりも簡潔な文体が好まれる傾向があるが、圧縮された構造のためかえって意味の明晰さが失われているという指摘は興味深い。

今日、英語はアジアにおいてもリングワ・フランカとしてますます重要性を増しているが、Gerhard Leitner, Azirah Hashim and Hans-Georg Wolf, eds. *Communicating with Asia: The Future of English as a Global Language* (Cambridge University Press) はアジアにおける英語を考察した論文集で、Nobuyuki Hino, “English for Japan: in the Cultural Context of the East-Asian Expanding Circle”, Danilo T. Dayag, “Preposition Stranding and Pied-piping in Philippine English: a Corpus-based Study”, Ying-Ying Tan, “The Americanization of the Phonology of Asian Englishes: Evidence from Singapore” など所収。

国内では、菊池清明『英語学：現代英語をより深く知るために——世界共通語の諸相と未来』（春風社）が管見に入った。これは現代英語について、文法、語源、ポリティカル・コレクトネスなど多岐にわたる観点から書かれた論文集である。

### III. 論文集(すでにふれた論文集については割愛)

記念論文集としては、長年にわたり古英語研究に多大な貢献をしてきた2人の学者へ捧げられたものをまず挙げたい。M. J. Toswell and Lindy Brady, eds. *Early English Poetic Culture and Metre: The Influence of G. R. Russom* (ARC Humanities Press) は近年の古英詩韻律理論の発展に大きな影響を与えたブラウン大学名誉教授 Geoffrey R. Russom に捧げられた論文集で、Thomas Cable の序文に続き、古英詩に関わる論文などを収録。日本人研究者からの寄稿として Haruko Momma, “The Old English Metrical Psalms: Practice and Theory of Translation”, Jun Terasawa, “*Secg betsta* and *ðegn betstan*: A Reconsideration of the Short Verses in *Beowulf*” がある。Leonard Neidorf, Rafael J. Pascual and Tom Shippey, eds. *Old English Philology: Studies in Honour of R.D. Fulk* (Boydell and Brewer) は、Klaeber 版 *Beowulf* の改訂(第4版)作業で中心的な役割を果たすなど、とりわけ古英語本文批評や韻律の分野で輝かしい業績を残してきた Robert D. Fulk へ献呈された論文集である。21名の学者が寄稿し、日本人研究者の論文(Haruko Momma, “*Worm*: A Lexical Approach to the *Beowulf* Manuscript”, Jun Terasawa, “The Suppression of the Subjunctive in *Beowulf*: A Metrical Explanation”) も含む。Anita Auer, Victorina González-Díaz, Jane Hodson and Violeta Sotirova, eds. *Linguistics and Literary History: In Honour*

of *Sylvia Adamson* (John Benjamins) はマンチェスター大学やシェフィールド大学で教授を務めた Sylvia Adamson 氏へ捧げた論文集で、氏の研究を反映し文体論、文学理論、通時言語学などの論文が収められている。英語史に関わる論文としては、Philip Durkin and Kathryn Allan, “Borrowing and Copy: A Philological Approach to Early Modern English Lexicology”, Joe Bray, “The First Person in Fiction of the 1790s”, Jane Hodson, “Jane Austen and the Prescriptivists” が収められている。

学会の成果をまとめた論文集としては、Yuki Takahashi, Tomoharu Hirota, Hiroshi Yadomi and Yasutaka Imai, eds. *Aspects of English: Proceedings of Kyoto Postgraduate Conference on English Historical Linguistics 2016* (Kyoto University) がある。これは 2016 年に京都大学で開かれた英語史学会で発表された新進気鋭の研究者の論文を収録したものである。

このほか英語史に関連する論文集としては、以下のものが挙げられる。Don Chapman, Colette Moore and Miranda Wilcox, eds. *Studies in the History of the English Language VII: Generalizing vs. Particularizing Methodologies in Historical Linguistic Analysis* (Walter de Gruyter) は英語史の論文集シリーズである *Studies in the History of the English Language* の続編で古英語から近代英語に関する論文が収められている。Ken Nakagawa, Akiyuki Jimura and Osamu Imahayashi, eds. *Language and Style in English Literature* (Keisuisha) はチョーサーからディケンズまで言語・文体に関する論文を収録。

#### IV. 学術誌掲載論文

2016 年に国内の学術誌に掲載された英語史関連の論文を以下、学術誌別にリストアップしておく。前回同様、国内紀要に発表された論文に関しては残念ながらスペースの都合上割愛せざるを得なかったが、『英語年鑑』の「個人研究業績一覧」を参照されたい。

<*Studies in Medieval English Language and Literature* No. 31> Michiko Ogura, “Stylistic Devices for Introducing Direct Speech in Old English Poetry”, Hiroshi Ogawa, “Three Syntactical Notes on the *Catholic Homilies*”, 玉川明日美「*The Reeve’s Tale* と北部方言」; <『日本英文学会第 88 回大会 Proceedings; 付 2015 年度支部大会 Proceedings』> 近藤亮一「空の補文標識の歴史的発達について」、長田詳平「英語助動詞の補部構造の変遷についての一考察——古英語従属節における動詞群語順を中心に」、小倉美知子「*Self* の存在意義」、濱田里美「*The Wife of Bath* の自伝的語り——*The Book of Margery Kempe* との比較を中心に」、鶴田学「アクションの修辞学——弁論術とシェイクスピア演劇の台詞」、太田一昭「*Edward III* の印象批評とコンピューター解釈」、地村彰之「Chaucer とヨーロッパ大陸の影響」、西村政人



「Boccaccio の *Il Filostrato* から見た Chaucer の *Troilus and Criseyde*」, 大野英志 「*Le Livre de Mellibee et Prudence* と *The Tale of Melibee*」, 浅香佳子 「魔術か科学か, Chaucer の関心——miracle, wonder, illusion, natural magic, science」, 笹本長敬 「*The Clerk's Tale*——書き改められた Griselda の物語」, 鈴木敬了 「詩人はどのように詩をつくったのか——頭韻と語順の関係から」, 守屋靖代 「中英語韻律論へのアプローチと問題点」, 鎌田幸雄 「OE から ME への頭韻伝統の継承と発展——‘man’ の詩的同義語の用法を中心に」, 水野政勝 「初期近代英語を通して見た福村虎治郎の ‘形態と意味’——シェークスピアの劇作品の副詞的先行詞をもつ不定詞関係節を中心に」, 柳朋宏 「英語歴史統語論から言語の変化と不変化を探ってみる」, 柳朋宏 「古英語の名詞句内における形容詞の分布と統語位置」, バイチゴチ 「英語史における軽名詞句転移の消失について」, 大野英志 「チョーサーの感情表現——Herte をを中心に」, 太田一昭 「『初期英国演劇資料集』 (*Records of Early English Drama*) を読む——特権劇団としての宮内大臣一座・国王一座」; 〈*JELS* 33〉 林 智昭 「動詞派生前置詞 barring の通時的発達」, 保坂道雄 「パラメータ再考: Broad Syntax の視点から見た言語の共時的・通時的多様性」, 茨木正志郎 「名詞修飾形容詞の歴史の変遷について」, 岩橋一樹 「英語における形容詞の意味変化の双方向性をめぐって」, Akiko Nagano, “The Category and Historical Development of the Prefix *a-*”, 中尾佳行 「チョーサーの言語の身体性——「トパス卿の話」にみる〈漸減化〉の認知プロセス」, Michi Shiina, “Pragmatic Implications of Historical Data: Speech Acts in the Flux of Power”; 〈*近代英語研究* No. 32〉 Kanako Asaka, “Examining the Opening of *Mrs. Dalloway*: Analysing Discourse Structure and Words”, 藤原保明 「複合名詞における man の母音弱化」, 渡辺拓人 「近代英語期英訳聖書における未来表現の変遷——ギリシア語迂言未来表現 μέλλω + inf. の訳語を通じて」, 山村崇斗 「英語法助動詞の発達に関する動詞句省略の形態統語的分析からの一考察」, Minako Nakayasu, “*That is to Say or This is to Say?* A Note on Metadiscourse in the History of English”, 竹腰敦 「近代英語から現代英語における whoever/whomever の分布と推移」, Michiko Yaguchi, “The Diachronic Development of Subject Raising in Existential Sentences”; 〈*English Linguistics* Vol. 33〉 Koji Koike, “The Development of Negative-Initial Constructions in the History of English”, Ryohei Naya, “Deverbal Noun-Forming Processes in English”; 〈*英語コーパス研究* 23〉 久屋愛実 「Belfast 英語における平叙文と平叙疑問文の文末上昇調にみられる音響的差異——コーパスを利用したイントネーション研究」.

(東京大学教授)